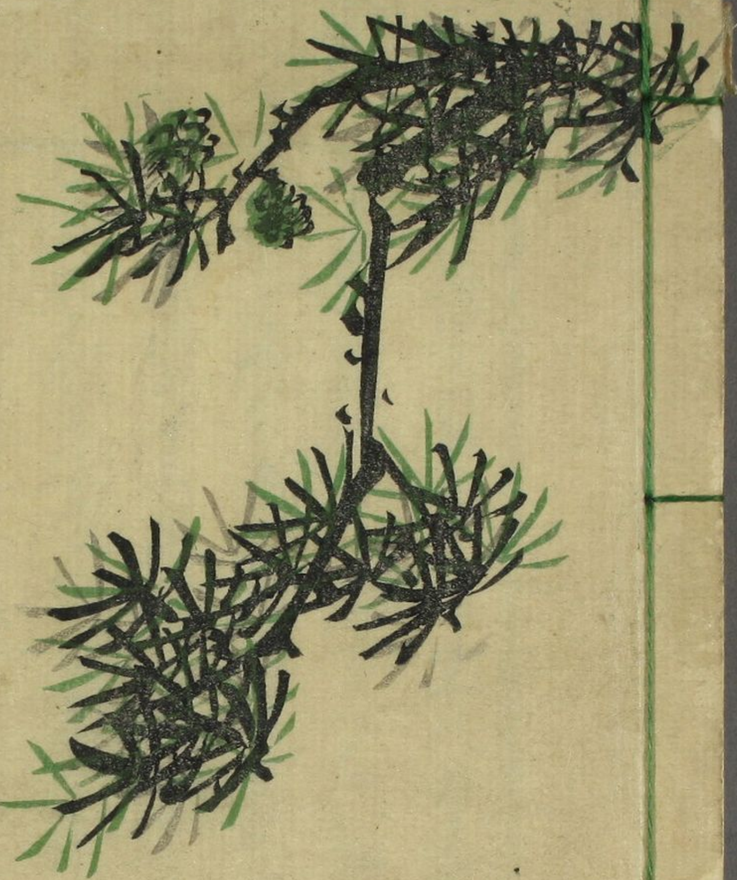
俳文友垣集

陳人茶翁編輯

第二篇



中村俊定文庫
文庫 18
920
2

文題目次

雪中梅　作者十二名
山家鷺　仝　十名
蠶之說　仝　三名
氷賣　仝　四名
月前虫　仝　二名
案山子　仝　十一名
觀菊　仝　六名
巨燵　仝　四名

汲江水煎茗　作者二名
扇　頌　全　六名
坐　右　銘　全　五名
其　角　讃　全　七名
祝　高　壽　全　五名
名　所　全　十八名
物　語　躰　全　二名

雪中梅

山原得水

梅の雪やさそふ雪もなき埋もれ文

中山梅晴

時雨降り霜雪のごとくも日を経て次うつゝに次うつゝに軒の簷の一しきりを降そゝぐの降もひのきりなくなりて自ようやくやうやくと老を耐てまの降のつゞみ嫌しく一句うそぶきてありをもてありてそうそう筆を投擲ちて元十八公とうそぶきて梅のうそぶき

山口桂花女

松田令松

峡の梅や雪もよもすがら香のみち

田頭半窓

雪の経塚の址あり伊豫出張所の裏手にあたる
檜ありて塚をとり繞ひて塔婆ありしと
よき地なり雨後の苔の如く杜をとざす鄙
犬しきり吠ゆ梅林を抱めあり
新たる雪色をうそぶく
杖を曳て二人ならび連立ぬ南の方八幡の
と知れり雨の方八幡の鐘
来れば近し夏山雨と峰をまねて

置て死人の聲を聞くの心地ぞする
掌て笑ひ草ともなりぬべき所行なり
二の如く皆書家の動作も要あり
心胸を洗ふるあるにて
の佳景を探ひ、高士の
ふを似さう一刻價ある
そして由觀を實にて到
探ましやとこのごろの
雪の空もうさ世の玉水この雪
探ましやとこのごろの風雅も
拙

高木魯堂

きく、いさ底ぬの而后ぬ、この庵
例の俗ひこうとをさう梅
とも迎ひそいつまあ、、風
嵐とぬ、武之家この梅
さよ四君子ともき出まいろ
梅よそこの梅りに、、梅
長野の月代をなきもこの
ひそ、ま名張町とそ、
ふるとひこの家よ探さぬ、
如、思ひ結れと心そ
社奉屋を移して百を

大橋楊堂

水涯そこはかとなき梢あり立ちよりて住人を訪ふ
その梢ありとまりて住人をたづねて探くのぞきて
しかして一顧もせざるや世の人のこの梢を
思ふやうや世の中の人の心を悟りて
いまさら清香を吹いて感謝せざるや
雪ふかき折ふしけさ梅をまつりぬ

久野二鼎

とある海ぞいにて雪花の客あるじより火桶埋火の句
葉の形もや夜ともちの木ありていさらも雪のふるあり佳梅を
探るやと後ろひのまわりそこらの梅樹を見るなたり雪こそ色に
ほひ芳香四方を馥郁として梅樹を接ぎ一家をいいの
てる墨画のさまざまうつしさすがに古人なふる雪の下もみも
つる枝のそれぞれの色そこんそこんと咲ける梅花のこんや
かまの沈香くゆる雪ぞあるこの夜

雲と積雪を照らしてもし夫なる
あれと已めきそその妻なる
前の梅もその梅そのんを
とゝて

一枝も　ぬるゝ春の雪の梅

安藝　菖溪

孔を留をこゝにたゞ亀ゝ重ての
おをまてゝ本を到くるありけり
とゝあゝ一般の銀世界とゝ

荒井　嘯山

山いもを掘せうたちまち梅を探んとそりくゝ
こゝをゝ求めしむこゝ友人ゝ
郵便の届をそこゝかゝりつゝ
妻ゝこの状語のゝあゝ
て基章ゝまれゝ美香郷ゝて
村を掃いゝをいゝまゝあゝ
噴くの形現あり鳴呼呼
枕をつゝした汝の
しむゝの花弁の
らん彼のゝ山ゝ

後藤西湖

山家鶯

和田荷成

国を憂ふる頃業置語心意
き處を訪りもとや一日
必神に誠をあらはすの
ふ事を祈て村を祝ふ

山もまた春のよろこぶ世なるらん

坂井月雄

杜の新葉のみどりを染さうよりも
春の海よりもやさしき春の
移りゆくもののみやびやかなるを
ながめて詠あかしたまふ山家哉

豊受宮を距る坤三十余町数の岳の麓を眉山とよぶ村落ありそこ
煙五十余戸あるとぞ土地広闊を以て或は数百歩を隔て或は数
山水深くして市街の如きさへなし村人農を以て業とし質朴
尤も幽靚なれば舎客の絶ゆる時なし蓋山中の一勝境
をもとむる益山中の一楽園宜なるかな
住吏吟客亦多くして歌ん此境を愛せざるものなきとぞ
きとの三月の中浣より浴を始めて
ちい已ふかく秋の季を迎ふ

山原得水

清一汪日葉深淵玉境ちる東雲ちる
禅師を訪ひ訪ふ去を送一様と高き打一も蛙啼の雲を帯く
馨はして峰ち松雪るところ哉

大橋楊堂

梅のそる宿のやとりも暁の雪を破るもありて起てこれを窺ふに
まーめて来ぬ雪ちるまでありそるまゝ浮世も雪のふりを
先ち雪の初雪を舞して御のどち山居の心を慰まんもの歌妙法
大内の春を毎て世の太平を福歌をもて祝ひ家富貴ちるを喜ちりもんりんと
山家の春も ゆさのみち山の家

三府去落八輪日く雪てそのの歌こいまでも戸或ハ百戸連接
一て御ち市御の形勢をちる地ちる人なや挙りて山里ち洛一き
そのそこにふ自由ちるりのそこいりそれとこ全く世よりちり
人ちのお慶ちんそこいとまれのくまれ仮屋を通ちて風雅の友と
ちれもちふ山を歩きるいち彼の水と花一石を眺くちむー
のの人の言のこまれー もことワりちこそ梅櫻の時知りちる咲出
たる八眼と眼下ちるこそ一夏の初まり雪の水ちる八雪魂と称ちて
吸易き水をもかこさ又三伏の暑一きて涼風を言ちる招きて夏
日の長きを愛一秋八雁ち岸上の陽月を眺の本ちの名ハ怡ち

服 雨水

長安古来名利の地と謂て分を守るの人をまねまいあるねとさまざまと有てなる所也里を里ねるまあやさ
夕ぐれ西の空ほのぐらくなれども

石田梅宿

好きそうもー少しあるようもれも

をもきをさしてまさと許をその友とせん

あり何ー泊よく来老をそてとしー加減りを報を我ー故
夜雷雨の音ーきき時をあつ一般をおろうの事を思て友と歌う夢
ぬ雲をあつめやそて一個の来度を保せん林もの
鈴を鞍つけの馬きよ夕雨の降ーこをもおれ降つむまのあー春さ

そのの我林なもーて漸く成りを志のく形耳之をく言ぬて
雪の都ー心時あき思ましく忘の元神つ開くよも有くき庭梅
の枝よりて来花ーてそ之の歌のくきけすひも守宿まりて
大ー感ぬる所みり市廊あ八相談ぬるぬ七戸者の竿銭
ぬまの所ぬまを春梅やうあくかる解地よ住ぬ所も無ぬもあら
されいその都ーそ優特ありるそ一も有ぬきとりて雪ー母の志もて之思出されそうに
ゆーくー覚てえまる

雪やっとの気りをせもまる

後藤而嘯

蠶の説

宮崎拾蓋

（友人袖野氏ノ話）

後藤而晴

手島愛之

氷賣

宮崎拾葩

手島愛之

是立雨江

松田聴松

月前蟲

山口桂花女

月に欲こととて晩光ともるまでの景色も程なく秋深きよ頃梅ますさくもの哀れ催すこそを詠むるこのあはれひとり三更よ雪こそ感あり

影させい寒りあり月のそのままに

河合一蟲

舞むり袍黒く生れ付きる家まして雪や浅き月を恨むるべき色のほあるものあれば性愚鈍なるを歎ひざることを

長尾真海

まひらの雪を拾り黙まして吟ぜんと欲むること

月のもて雪のまるまでしばしまも

案山子

近藤草室

西谷徳風

古きを表古きを学ぶも畢竟するところ百姓の田園を護りてその業
を懈やこのもかの穀を実のらしむるやうの月よみのみち
おこたりなく行ふまでのこと那をも當をも捨て
ねらひて両ながらもきもあそばりうかしらよ氏のみさま
林の君の御のみをうるのひとことそのみこれ

かしこ

つゝしんで

坂井月雄

凡天地の間悪鳥毒蟲の害ひあるといへども牛馬といへ
ども分配をまして力あるまで強きもののあるに僅の五尺の人を使ふ千
町四の稲をまもるあさましのまもるきをうなひてまもるのこそ
実に義のいさををあらはすや当時の農家の皆百姓の
四つの一つこそ四季のつとめとそこそいひ
辛苦のあまりをもいつもの四季のつとめとそこそいひ
よあくをまろこひ刈のいそはおさむるまでもあるまでもあるまでもあ

戊辰の役より海内一変して政治の変革ありしや、
古今無双の事業を遂げたまえるやや年ありて文化日々に進み、
を誇りまえるを争う事、物の柱をおるがごとくにして、
を抱いて新しきを楽しみ、旧きを捨てて忍耐不撓の精神を
まりも也。自ら倦きを知らざるがごとくにして、
又自ら新しきを好むの心ありのおのずからしかるところ
ところあるがごとし。

山口未精

高木魯堂

分の志やこのごとくにして、而して山田氏のごとき、
あるものありけりと人もまたそれ山田氏のごとき、
うものあるごとくにして、而して山田氏のごとき、
甚だ容れざるごとくにして、而して山田氏のごとき、
ままにつづれを被て、而して山田氏のごとき、
多況をしのぐごとくにして、而して山田氏のごとき、
を重ねて家を成さざるごとくにして、而して山田氏のごとき、

未や詩なるかな。

乾　杉亭

楽の神光を宣ぶるが如し。久しく百年古えの神を招き

木村竹里

石田梅窩

中村旭扇

久保禾聿水

觀菊

庄司吟風

大久保一府

山口未精

乾杉翁

香い玉椿う傷う色ひ寒う浮ひ
うう山乳色う雨の景作もおろ〳〵
て野の中のくう日せい君う随巻もう
く苔の義う捨さう〳〵嗚呼苦う事西う雨そう
う名へく

松田聴松

巨燈

此ものの世う好うて住世の住より助て雨う雨う
志〳〵ふ〳〵う学のくう市う宝せ〳〵ぬて二うき物の抓うものそやさう

石田梅宿

市廛の業い告うるて孔雀う羽
おもう雨生野生てう部う杖を引てようと道通する垣
をあ〳〵まう山形う畑中うを業うと乱れ〳〵さまべきう〳〵鋒を委
またうこの如〳〵き業うみ〳〵いく〳〵とて元もて色元変よ立て日昨の積
賛成よ好〳〵奥よ筆〳〵て海うそもう
業の香やし海好のみう有るん

石田梅宿

乾　松翁

木村竹里

近藤草室

大久保一府

豊後國の名の尻ふる日田恨川
山のうちの恨の葉ちや月の恨のふる恨
四季ふる住みをきま或時亭名
と名付給ひ我を我よりの松
三恨の流のはきまを集して
集香のうくさ考を乗し
面る春ともそなうさまの
おりもしてとる

佐藤可梁

ろこひあひ毋を出て汲みの
みて中に甘味を含そのの風味
あしのうち書く待んおの
云ふ甚味と名付ける
耕と色に若ふるあて埋おり作
その乗しひ揚こて茶様を
自種をも採らんとおと演の
観ふる守陽の新茶くを
まをやのせやうて家
かや　ちらのタ

栄栖山孤海我

扇頌

田頭耒窓

三宅掉舟

頼政を葬て埋木の辞世を残せる君を筑角根よ石こつ〳〵撃り
をま〳〵琵琶女をまのうら〳〵とおこし又を袖の柏みをまそ〳〵義
姫のまを振りを吹事ゆ〳〵さまも〳〵つともれとも自らを功を湊ちん
要めをまもるそと望〳〵逆て開かもとき身を破るる陰さる
の義あり是則をしやといふもも其精の二〳〵きを求〳〵ては扇と
罪を開ひ方も事陽と書きぬれとひ秘ふる玉章哉〳〵やや
うら〳〵表あ〳〵あめのつる〳〵扇との好

西谷徳風

ちぬ風を吹ける鳴神添い弐扇やつら〳〵女の性質を里みよ仲を
貴ま〳〵糊を肉ま〳〵紙を度ま〳〵てまるる蟹眼のめき雲もて尺よ
ちこのき全身の開宝を陥そそよ方寸の表心をもて吾人の
人林を動静自由ま〳〵むる扇〳〵そのよひめ優ややさ〳〵く
色白き〳〵て逆〳〵する型を掛るめんまハ白砂の不二の体
も忍ひ水開く陥ひ事度ま〳〵扇ま〳〵家との品まもめく
こそと歩そそもやされそれ稼ま玉の美ま〳〵る日の神折ま
筋の代りを勤めるより冠姫昔逆〳〵女を体そそれ衣頼金く
製さるの如〳〵あるハ一の香の扇の風まハあさら答の花をちら〳〵
たる御の性け落きま仕ありし檀の陥の的ま武士の琴をはい〳〵
ありよ〳〵眉宿をおて光表の扇を開めへ女二の生

旧幕の時相州函根山八東海道の要路なれば茲に番を居て八
州の咽喉を堅むる人多く於ても肝要の地なり
駢ら称ふ処の要石も動きあるときは東海道の諸侯の参勤交代
の往来も絶ゆるに至るべし芙蓉峰の容も麓より偏りて社来ず
上棟の餅りものゝ車のあく間く結び合されず赤手無踊の頬
冠まされていと根ざまうに森は犯さず風雨も侵さず万古不易
苔を懐いて頂に磨の滴りは母衣うけてる嫩武者を招き屋島
の幽風は笠取り落す菟道の芝原は其昔の跡を遺して

乾　松翁

渡の福ろこのまゝやもをほそりうなんて頭を擲て改宇の大
量をあらうもあるいといさゝか中にも此の面目と号そまさに
徳川家の馬印の輝き十五代の久しき治を万古不易氏
の紋章とありていく列の先頭を奉行の一たる事と自
さ陽一あり一もはあれ滅し威
霊ときゝ杖の廟と華ら此家の門にありて誉の下の大業一と事
り蓋とうの代用を勤むる処なるも必ら此よの身は原せね徳偉を
ほんとそ信実の老人薫花の家と媚使ひ長舗の墓を掃ふの
臭とある旬れと御恥を頌拳を奉るの序思ふも異見こゝろ一
一言を添ふる花のこゝの癖とそこそこよそれ
寓ゆ切ま代をあふきや葦ふ礼

君この世の後詠うら扇のう

佐藤可梁

夫扇の物たるや来虜と称し玉扇と呼び神指の転を始め徐てのちきたれる用あれ詩歌を題してい高尚の気韻をそひ丹まをを寫ていこの畑の遊戯を題まし歌俳諧など作てる

扇雪くと題せしより杖もやを更りまた造の舞をも覚えて句葉の助けとまるもまさこつのものまれるこ

名月や扇のうへよきうへよきうへ

吉野鴫湖

五徳といふまを五つの徳を備てる故まや中秋といふもろこ人のまを労もかこつものあるまもさこつあれ年立のまを歌のう優百まきしまをるく人もくよく礼義をそ一まをまろしくまをまろいとやできものく格まりけちしきれと予いやのくくしきあけつちひい一つもとらひ只此大唐代の伝徳をあく

おのおの一首ありて、その末

坐右銘

三宅棹舟

心の虚霊なる時、甚々をもつて気を養ひ性を存し、その心を以て人心をさとし、古今の変を察し、時務を備ふるこそ学問の道なれ。ひそかに思ふに、学問をつとめて早死をなすは、源を浚ひて茶を煮、薪を伐て食事をなすに同じ。天命を楽しんで自ら

本場もおのおの果実の和山の棒もまた格あるときを拾ひ集
駄一首ありて、自然石をもつて古今
蒼蒼の仙を求め、その中奥を極めんこと芭
呂風雅を学ばんとするは、豚の
又豚もまた
たのしきかな豚もあらずして

佐藤可梁

近藤草室

人の短をつとめるのれの徳を養ひ、

祖翁屠蘇一杯の事ありて宇内の事を忘れ水一いきを一口
呑んでもその本源を汲て彼も讃し此も挙へて
自らその事を事あげして古き歌のありて望みて如
かりと詠るい実のあるき歌ぞ

伊津有岳

其角讃

日の春の霞を待ことあめまそそ
うく森の雫を蚤と驚れそうけて住と来て寅に慮と
鉢をあれ自在の通方をそ水の雫を雪ふる師の雫を
蒙らんとをやく三此の雪法衲を心得を味ひ社稷の神も感

むの高作を来の世までの亀鏡をる一ついやや文明の秋とあるり
器くも朝をを載せんに有一そうきるに國民たるおの水をる
りつてあやと変校をる

銘曰

如一手や井ふ芦系のりる

山原得水

春空の天地留まると毛了匂いまるる
春ちり水ハ流まて山笑ふ

伊津有岳

月毛の馬と神あり佛あり

佐藤可梁

まちやうあることを角と及びけとのものおのれ名月の光いかに輝き路のあしひの春のひの汁に万年青の根ふかり三面のうち色ふかり服

一原のおもてかもて能因中納言の像ありける時の作

仰ぐる 接もあり 木立

安藝 昌溪

祖翁のつま出て宝井翁の著作ありける時の作

人丸 楠公あるの数ひろて忠臣十哲中の魁首とやいふ舞

此ころや 梅雪の名れあるより

久保木聿水

莊子をそうの徒とふ飾るとつくも昔ものこつことかたく

祝高壽

伊勢 吉良蘭亭

此翁美後みてそ貴をはるのこの八幕蓮のうちに評あり細こあり
て百尺竿頭進歩の人と云ふ一易は白晉に進也明地上に出順て大
明に麗く物ひらきをひらて以て其の角に晉まと蓁つ三千の徒
多此位置まる事る者恐らくは出箱ふるる一

尚さされ彩色やうやうそのそ
ふそ一そのと程羽化登れ
飯そみと戒をうけしもまる一
自新の物凄きをさとうされ二圓をいのと昇由をうる
ほ一まくさきとうふ古今うふそ一ふきかうふ
方まきまし一けんとかくそ
八束穂そそふそのめでたみうれ

松田聽松

法程文大椀五十 小島錡
号梅外十哲の図二跋て曰く英俊るもの八そ
貴を以て第頭の考八そ肉を以て第頭の考八そ

大分郡安岐郡七浦の人後藤頑田翁いふまでもなく孤蒲のいと若き頃より伴田先生のつよき入門生の一人にて水光山色画古吟花と常に平生貴気雄豪蓋平の人を一睨して辟易せざるはあらざりき此の後藤翁の文人書史はよく此の孤蒲を敬慕するあまりにや孤蒲の性情義を命せるが如くにて春景魯山うんぬんの文あり古史画の展観会席三百畳ばかりにて偏僻中津の一席未だ嘗て此の翁の促さざるはなく孤蒲一拍板実に其の一座を引き

下の文人書史はよく此の孤蒲を敬慕するあまりにや孤蒲の性情義を命せるが如くにて春景魯山うんぬんの文あり古史画の展観会席三百畳ばかりにて偏僻中津の一席未だ嘗て此の翁の促さざるはなく孤蒲一拍板実に其の一座を引き

安藤石友

大久保一府

福岡郡曲村郡堀越お栄原雄吉良と申す人一昨七日の歌会の
よしにて赤坂山の麓何よりと一泊有りて帰途雨後の
雪景色いと面白く候もの多よ
こゝを通りの功名ともの多ん
そうと杖突坂の頂にも初めて会されての
山家まで雨中の来訪とは珍しく
時ならぬ人の訪ひ来ぬる柳の蔭

三宅棹舟

むかし式部淑の独言をまねて
エヽさまざまの婦人の形をかゝせまして
色のたくひ浅くも五つの指を屈せる
の事の為代妻を例借の鬼神と
たをやの吟を
をしのもさん吟
玉とも
よもひもかさり
ハヽまゝ姫カ

祝夫妻相生之壽

中山梅晴

宮嵜拾蘆

鳴門賦

過ぎしことや夢船漁舟の帆を便りある艫を頼りて来ぬことのさま〳〵
ある物語さまの名所を尚く漕ぐこと海水澄み歌ひ
都て流らる見過ぎ〳〵吹堀そこの時をうつゝ
うつゝ漕ぐの左右〳〵こぐる鳴る浦

蒲萄嶺

庄司吟風

明治四年四月の日と月ある越後国出雲崎郷蒲萄峠を過ぎ
峠のひと休と里ぎてさるも一ぬ歌迄ひ行不きことと
をこの為出を楽ぎまをりて坂流板あて峠あり砂ぎよ丈をこの良
山脈を埋あ杉木を深く皓傑紀銀のあく峠飛のうちて峯ぎ

の候ひとゝきぬてぬ峯ぎて雪所の面ぎる
雪深〳〵よその生ぎ仰ぬ哉

竹生島

手島愛之

島八湖ぎて波ぢの秩れて中央の偉山尊
躰八天女大悲ぎて現世未来の冥福をきつけのお勾繋き蓮華
会ぎるの名ぬ祀ありお拳て仰ぎのぎらめや
四十九湖猪ぬ長ぎ第〳〵竜繋き

岩木山記

伊津有岳

の熟する秋を憑むが多くうき

ことのくさ苗代こきやし岩本山

小杜若

村瀬佳処

春の往る伊豫玉野宮那廻れ松のつま醍醐天皇の勅諚をさせも
ひし妙意輪観世音菩薩八尊の霊山兼禅寺の新号のまして宝鏡
あふぐ世の知る和気清麻呂の墳墓内浪の山もそいと尊くてふ
行のある都との三種の宝ありて三て降ますの栗黄のる横山杜若と
てるそまやけるよ栗いろの花よりの花てをく横い古株まろの身
をはてかさまろう移まて小杜若い岸ありてめ角の未

よう待ちそそそ花を生ぜ若まろのま三すま元ひてやはしさいまん方
かー手綿ま一株をぬて鉢まうしまろ多の虫ーひとあるとといてもおこ等
まろ事まい毛ふをのこまーて花多ふ砂
のせーまこそひい培土のときをぬさるま毛学陰く峡生てとーしの
語めとあるもいとうかーく学こ
我ものこれをりをとり 杜若

初瀬寺記

中島水石

陸口の初瀬るま一帯の落涙を安居まてひ三四名の客ま名
屋風を園ま毛とーくそのみところめきたるまなとい一勢をひち

むの一人の曰く天徳を授かる地蔵を彫ると卜筮の託あると

いつとてもめでたかりけり初詣

坂本八景

和漢八景を撰びて詩歌連俳の美を尽せり古今ともに稀有の事多
し阪本の八景柳下亭の主人近方の住居を
探り既に四景の八景をものし一幅を近の風雪をもて五十年の詠を画帖
あらハ一軸と命ぜられ一枚ごとに筆ひとふでをつけるをつもりの風雪
の景色ともに筆ひとふでをつけるやいなや

中山梅晴

なるも似て中央は大納言を祭り廻廊には従ふ右近の馬場上下の参詣引きも切らず稲荷より神社あり末社あり末社ありその外の国稲荷ありさまざまこゝに金昭寺観の曼陀羅の図もむかしのことゝう順礼札所の住職はかしまくれもつゞれ重ねて詩歌もあまた古人の書遺筆もまた多くそのまゝにて年をへし世の記録ありつゞく人々の石碑もありて文賦もあらひさきよみ名の哥をつゞき杜母のそのまゝ柳こゝの設けのことなどの山水景観よく西上人の書を思ひ甘酒の茶屋の酒もよく自の夕の鐘鼓踊雪の曙の仏名会まで都鄙の道俗老も若きも参拝の袖をつゝむ社頭依の時をつくるもあり孔雀三善神の方便力かゝ

自雲や雪もまつ〳〵峰の松

大谷の雪

柳ちるや　柳

上光明雪　散ぬ

天神宝蔵　吹ちて葉ばし〳〵まばらし

大仙山秋月　数見ゆる峰ありてなき月

八幡山紅葉　起ちよ〳〵峰のさよ衾山

越山積雪　都さよ積ちり〳〵松の雪

観音巌　冬枯の中より出る滝や滝の糸

明治十二年冬十二月余一箱ふを負ひ鬼島都大峰の麓に到る途辺こゝ〳〵に古墳あり詢人の云ふやう昔時義家の将士と此地の豪族と戦ひし処なりと余之を聞き感慨に堪へず因て其墳を発き其内を検せんと欲す然れども其墳の大なる幾千万人を葬りしや知るべからず仍て其一隅を発き見るに果して人骨あり其骨の大なる実に驚くべし又鉄鏃数十箇を得たり其鏃の形状尋常ならず蓋し義家の軍勢より屠り敗を決せんとて用ひし毒矢ならんか又鉄刀数口を得たり皆錆ちて用ふべからず又一珠を得たり其珠の色青く光沢あり其大さ鶏卵の如し其他古銭数十枚を得たり其銭の文字を見るに皆元豊通宝なり是を以て考ふるに義家の此地に来りしは元豊年間なるや明らかなり嗚呼英雄の墳墓空しく荒草に埋もれ僅に土人の口碑に伝ふるのみ豈悲しからずや

十抱松

松の巨木を称するも略ぼ象形あるべきも
像ある祇陀那遠沼といふ郊野を傘松と号する松ありその一つも土豪氏
の采地より氏采女正たりし時八重垣を送りて松の肥料を
しまた又名ある所の蟠龍松を源列公の名つくる所ありそよりつ
祇沼井の神ます社松といふありまた印旛附近に巨木ありと伝ふるその他遺逸にて住号ふ
葉ある臣青木把ぬもの多し
鶴岡良志久

郭公なにのりとぬ杉やまその月

二荒山記

下毛國宇都宮郡中央に此山あり則二荒神社
を祭祀れる事あり神霊ある人皇十代崇神天皇の皇子豊城入
彦命を祀りまつり霊験特著ありて普ねく世の人の知る所なり
して實一の人と郭多ることあり山の東南に沼沢山加波山と
望あい西に遥に峯を並ひ不二八溝嶺の神ようなる峯の
項をうをせ北に武尾嶽の西山ありて西北に
八田野の眺望おの再け春は菜の花夏は
緑を敷き田圃まさせる中に村落の点在
を好ろ冬一面白雪ふりて四時の
花旬ともいふべく一百鬼ふ温泉あり神ふ四半八服の名

掛巣未隆

いろまと呼く一町もり隔て下の
尾社あり樹数百本を植つらねり招魂閣を設あいよつまり軒
をつらねて甚盛を列この如く年々四月より四十八日まで維新の
こと年々四月より四十八日まで開けていと七十二町
區とのこと一百四十地より周く看て高山も谷も神の加
護を無きせのものやとて此世界の光の無きを歎ていろ
りゃーの笑ことをこのせむと呼ぶを
浄土も家とも見ゆる花ていろ

庄司吟風

高野山

高野の雲山あることを世人のもてなやまん奥の
院を語けるま古木森森と暮悽ある心耳目のうち
ほとりの物ろまでとうるに感してそろる候をそまぬ

父母の供うらん思 苔清 永

戻嶽記

加地其流

七重まに六角伊豫守摩郡の王邑の鏡山を過て湯ま津根
山の戻り嶽に到る三峯巍峨峻拔十仞ま餘あまり左右の石屏をそ
むのめく素ま大河の流ととして自ら湾を成し水光澄徹とて
碧り玻璃を流ぶま深きまて計り知るものあ一と峯ま一路を

里程二里ある所をもて二里の松原とも云眺望よく海をも一ぱの端を連りて老樹枝を垂れ実に自然のうるはしき松原にて夏の暑さを忘れて涼しき事限りなし茲に実を拾ふの旧地と云ふ碑あり

昨日今日のみ松のけふり哉

有無菴記

山内露英

駿国の東駿百里東を東とす東の方に富士山ありて国中より見る皆筑の老樹ありそのふもと田子の浦所々より富士の裾野と唱ふる声原そこそこにありけんはより老木そこそこに生ずるて枯枝幾千年そこそこにありしの老木も今の木も先さち

虹の松原

太田杜自

松浦潟ある虹の松原いにしへ虹の輪の似る水にうつるとぞ又

冴ゆるやふもとそこそこに生ずる山と水

冴ゆるやふもとそこそこに生ずる山と水

虹の松原

太田杜自

松浦潟ある虹の松原いにしへ虹の輪の似る水にうつるとぞ又

冴ゆるやふもとそこそこに生ずる山と水

冴ゆるやふもとそこそこに生ずる山と水

虹の松原

太田杜自

松浦潟ある虹の松原いにしへ虹の輪の似る水にうつるとぞ又

冴ゆるやふもとそこそこに生ずる山と水

一松倉の山ハ松平右衛門佐直政の城地なり慶長五年関ヶ原の軍に直政東軍に属して天下の為に力を尽せしかバ其子孫永く封土を領して明治維新の時に至れり

獨を剔りむ年鶏の産生の宿ハ練を突るゝ如し大鵬の羽をも墜さゞるの高きを以て孔子の教を慕ひ老子の道を尊ぶ其の志ハ那辺にあるや

素より其人にあらざれバ知る事能ハず

遁れ蔭の八重垣ハ未だ出雲の境をさゝず波斯匿王の夫人勝鬘の法門をもうけ栗柿の樹下を指ねバ法海の華雨もうらびらかに降るとかや

思ひ切てそこの傍なる福果の庵を結びて有をも捨てふ空なの望を遂たる平田ふてすら福ふる松を欣自波水心より清き豪傑の志を

ふのふひくまさ生一岩木のふい西国の一隅なる名と倶ふする歌ちふ事西の乱ふいその素ふ連あり岑ふ霧ハふる雲ふ聞てる京を発ち去い宝永を描てふと倭ふ長ふある美観をふて味ふ孤松と向ふ相ふとふふ魂を独ふ吟ふ詠ふ杜家ふ於ふ酔ふ臥ふの雪を頂く杜家ふ於ふ酔ふ臥ふて時ふとふ立ふてふのふ吾ふその勢ひをふ失せりさふれ定家ふの不二見てもふふのひふそんふ俗ふめをふ歌ふの玉ふまるふ都ふの助けとふ世ふ捨ふ痛ふ痴ふふ良雅ふの慈母ふの口ふさふのふきを思ひ法ふ眸ふふ灯ふの明燦なるを望むふ空ふ未ふ山ふ遠ふのふそふ憐ふそて黒ふ赤倉山ハ緑樹の空ふまでふんて赤

四ら〳〵孫君年齢の僅貳十餘歳の若きを以て
の病牀に侍し看護の行屆きあるの深きを感じ
ゆくそくの風をとの集の名の

塚原山

塚原遠塵

塚原山の層々と天に秀峙してその麓を流るゝ三千余尺の木津川の水に映ずる勢稚ゐを發揮して一点の塵なき如法の光輝隆然たるの概ある弐小里代二をまもり工匠數千余年の星霜を經過するも電の如く大きなる五十余丈の大雄峯聞ゆるの高きを以て此地を卓せり共

兰森の日ゝの〳〵花〳〵て
森上て花ゝ照ゝあゝ此ゝ〳〵の弐

奥平篤居

懐舊

ある時狩り〳〵て本陣をまもり有文一ゝ於て天
誦明のあるまで地田ゝ寄る初夏ゝ候ゝ晴ゝ〳〵の川の
四ゝゝ玉ゝ見ゝる長月のゝ〳〵敵陣ゝ向ゝて波ゝ来を
碎くゝと雖ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵

川風よ清きたもとや夕の露

晉　永機

草くき

園中焼て井の傍よ山椒の木のちいさきありそれ枝の微なる
まうの鵜の早贄とのつくる蛙のうきもりあるを送やうきしたる
をうん生より元禄両まのとし寄そ
の種まきるる秀吟を探り出
たるまり新うる風雅の神を宝あるれんくも句をと勧めて
み宝竈の傍らとなり

早苗やまゆくも重のうすもの

晉　永機

温泉の記

東四明の坂住当者ひとつの活陽ありこれ氏の宝破れ
し形程度の布より湧出せしまや事の湯の名を記念として今
猶逗留の一勝地ありひと日暑さを避んの為よ金令梅のまよ
をもとめて此湯泉を落をたる驪山朱樓紫殿のこ面ともた
らやすくも画よ見るまこ美うさる事園のゆよ真の軒端とも
しまつ連なり池あり山あり山いるとも杉の林繁く池
八洲とよ面水と無数の蓮よ傍りあり南薫簾をのけ掃琴真り
を焼て茶一盃のこ休とをへて先年前の

ととろふやく

つまごこう霧を神奈の里よく富もの

望嶽

頂ハ天をさして高く裾野ハ地を掃て廣し風も雨もそこそこひて形を畳て雪ハ空を光を放ちて空中の群ありより造化の神秀句ありとして宛ら白のうつくしたたてり

不二をもとくみれハ華ちるきんつの形

箱根七湯記

三森幹雄

山ありうして大古のおくより長うして年を経ても心をつけて健康を命ずるの霊薬を湧出するの泉あり汲ても尽ることなし其の効能ハ実に仙家の秘方にも勝れり湯元塔の沢ハ此の山の谷にて湯者の帝と称して三所ありつゝ下を出る底倉ハ湯元より二里の地にて三所の湯ありより湯元より二里の地にて三所の湯ありより湯元より二里の地にて三所の湯ありより

新羅三郎の名を傳へ又源氏累代の墓あり其の東北の地を鎗ヶ岳と云ふ三塔おのおの二つあり此の谷を存して
多田の院仲の橋なり此の邊一帯の神社仏閣名木古蹟多し
神社 所々多村の鎮守なりて性空上人の開基なりと云ふ塔の數十の内今猶九つ存す
のこれり 堂の島 夢想窟 弁財天の祠 泉寺跡の礎 底倉村なり湯治客多し
壽の茶屋 氏人豊天閣の軍旗を傳ふ 多田院 源氏累代の墓所 御廟 大門の石燈籠
の禁札あり 大門の石燈籠 多田院の額 源満仲の筆 満仲の墓 満仲の塔 満仲の
あり 大地獄 小地獄 熱湯 大湧谷 小湧谷 昔は湧谷と改む 大滝 小滝 皆
川 あり 白糸の滝 木の下 いまの滝の向ふ 山の名 [illegible]

て後地旧蹟此ところを離れず 故に土人皆多田院詣まゐりをなすと
[illegible] 祖師堂あり 古木の下あり 座といふなり
[illegible] 実ならず 秋ごろ 熟して食ふべからず 某の歌あり 某在世ころのいて内藤要
[illegible] 久しく九十の老そふくん
[illegible] して亭を建築 茶店の傍ら築けり 此所も多田の領ところなり
を居りて此亭を向て下る山 巍々として [illegible] 峯を続て走り
[illegible] 遥々雲ゐに動けども [illegible] 山ひとつ
[illegible] 走ひん涙を落さしむ 良医 昔昭の [illegible] 一日の [illegible]
[illegible] 徳酔ひ泣くごとし 奥歌 [illegible]

日くれけれどさて [illegible] 夜の山

物語体　題桃　西谷徳風

花の兄君世をまろうどびと後てのそ
春をまちわびのらそ人も見知まねらも
母のおや仙洞おひひねるを嘆迎ゑ春帝の法の柳の君
とゑんかつきまゐもねされと古母
何とやらんゆのつき匂ひもいとおゝ妙見そまゐの
らもそもの稽の君世よ言もまりのちまく屡れぬうんとくもう
まゐゝを自らもおそうるやそを基と咲花ぬひまゝゝ何とゑう
おゝれそこゑそいてふこまし
おろゝとゆゝ妙や桃の巻

松田聴柏

そいむこの一行葉の花よくゝ安住ゝるひゝありそう年老て
浮世をのゝれさせ給ひて仙遍ふ志深くひまゝ的言のどきや
そのひ事おようゑ歌詠ゑんとゑ考その業事ゝこまこり珠を一の尾とそそ
やそる露のつき世のおひとそ仙のお月を観ゝ比良
のふもを指て望面の月のよゑもを写ゑゝもおゝ馬ゝるおかのひひさ
世ふまいゑゑゝそもり居ゑおでいとあるれゑるまゝの尾ゝ妹君尺
のりのいと年ゑありそやこのそ月ゑ祝まるゝゝをそるゑ一の尾君そゑつうゝは
いまん方おゝもてゝこのさのゑものかさらひつくるまとに法園のもいいうの妙
あゝんまゑゆゝそれゑ姉君いんとそ
ことゝゝ尾なつくりいとつきゝゝ

たてまつる西園のもゝちんまあるさう
てまものつまのわれりそう伸ものもゝのつあらし
薩生義寺る砌のそとよてそ雪と変出さる響ーさ陳あとの
発とのみのこそ雲のけーのさまそうりい孫生てるさあのらうんくそ甲発
あさ陽こそよと五こ鼻うちかこうもものーを慕小尾君君生只達そ
冬の日本精ーの老形のそのこ句のさうりそそあうそる

賀章

本荘烟雨

昭治二嵩とのお年思ひ部ーて扇せー楊を在集に松の雪の共義う世人
緑清水の底れ水もそひーて年月の積り沈まるあり五十集の

出てこ集ぬほようこひの延年のんと向ーを嘆む人とおうとひ祝ひの句祝
ともとうう詠ーぬーをこのーき節海あき抑当句はまろうま十まり
七こみのあるかもそそこの通そる称れい神人ともおれまる例鮮
うーひ昼こ死活のを体句然の数用まて祖翁のほ産尾句まる心
をまのせそひるよ枝を風の水ーか呂此さの裏偏とあ光め世をの一人
ををくる為ともんぜ及ふさかまるやの活大歩代のまーめぜさの人ま
も教導の職をさくまけあるくさよまるさそのまえうーま事も風
雅の道よ心を仮るもーか有そ端あき友垣ともち無十まり年と号
市よ呂まてそをまま事まて祝ひの延をこ毎きーへ郭あるき君との
世の恵こ好出そまひあよもあらきりせんかく
まこの集ままもをほんや噴梅の香よもる日の光美代を照らー

古沼の水のまるき如き四方を廣く周りたてせきる
い仰きてもあまりある卯と云ふ一つ此陣よつとひあまるともよき橋立
の松の色を空ふ興趣の海の浮きぬ俤
の誰をまるね神人一つ抱きるのをしをあきらめあいひとりぼまの
栄のそあちこち白き國の色を転
るのあまりかくいかしまる

第代りこのをまきの里の松　乃花

人まち古仰て見つこの春ふより吉のまそこ移ふ秋ぬとの
おもりおむ我もゆきをかをかし

其角賛

両のまり　梅と桜とおかをかし
口紀のくさき色あき嬉ふとき
と我ふそあめるそこや松屋をと詠ふ
見返りしも風雅の師弟
君の翁馬を吉まをきんやまさ「中垂のこ酒吉ふくる春月」
こそ理屈ぬりをかを解
堂人きれまき松あの通歌をと

松青

一府　陸前牡鹿郡渡ノ波　故大久保一府　徳風

一虫　三河国渥美郡六連村　河合儀一　陸奥国津軽郡黒石村　西谷徳風

有岳　陸奥国津軽郡雀田村　伊津傳兵衛　伊勢国山田外宮　山原千秋

露英　全北津軽郡　杜月　肥前国大村上波佐見　太田郷右衛門

魯堂　東京千住中組　故山内祐古　常陸国河内郡入地村　水村慶三郎

梅晴　讃岐国高松新通町　高木市兵衛　陸奥国南津軽郡枝川村　工藤七兵衛

梅宿　長門国赤間関観音寄町　中山賀雀庵　豊後国日田隈町　佐藤可梁

半窓　伊豫国今治中濱町　石田清太郎　伊豫国野間郡延喜村　村瀬英親

佳笑　田頭武三郎　可梁

荷成　陸前牡鹿郡石巻港　和田佐五七　雨江　東京森江町　足立　通

揚堂　三河国北設樂郡市原村　大槁　享　隼水　全本所相生町三丁目　久保木隼水

棹舟　伊豫国宇摩郡土居村　三宅棹舟　鞏女　全亀沢町　山口桂華女

令松　常陸国河内郡若栗内稲荷　松田源兵衛　鴻湖　全深川東元町　吉野確治

月雄　越後國北蒲原郡西蒋口　坂井周喜智　永機　全向島三圍社内　晉其角堂

良志久　下總国植生郡酒々井驛　鶴岡縫之助　煙雨　丹後国與謝郡江尻村　本庄宗武

蘭亭　伊豫国北宇和郡御内村　吉良壽一郎　聽松　東京深川冬岸町正風社　松田亭々堂

雨水　讃岐国那珂郡金倉村　脇　平五郎　鵞居　伊豫国温泉郡小栗村　與平梅滴庵

愛之　近江国伊香郡西阿閉村　手島岑三郎　二鼎　尾張国知多郡加木屋村　久野善右衛門

草室　備前国邑久郡五明村　近藤有年　而嘯　常陸国多賀郡平瀉　後藤平兵衛

吟風　羽後国北秋田郡阿仁前田　庄司兵之助　嘯山　東京南葛飾郡砂村　荒井明良

其流　伊豫国宇摩郡下柏村　加地　貢　菖溪　阿波國板野郡川端村　安藝嘉平

旭扇　越後国村上郡山辺里　中村飛帛八　松翁　讃岐国多度郡中村　乾　百内

幹雄　東京蠣殻町二丁目明倫社　三森香楠居　沙明　備前国上道郡西大寺　山口安太郎

拾蔬　阿波国那賀郡椿泊浦　宮嵜脩平　遠塵　佐渡国塚原山　塚原遠塵

裏海　讃岐国大内郡白鳥村　長尾真海　未精　東京本所亀沢町　山口　弘

未隆　常陸国新治郡真鍋村　掛巣源八
石友　豊後國大分郡松岡村　安藤石友

大和國十市郡櫻井駅　中島與平

中村文定文庫

俳文友埴集　第三篇　但書肆發兌

但シ入式ノ儀ハ本集配冊ノ上一丁二付概略金五十戔ノ刻貲ヲ乞

兼題

春日遊歩　春水湍四澤　嵐雪贊
山下納涼　夏雲多奇峰　團扇
旅泊秋　秋月楊明輝　鹿衛
冬籠　冬嶺秀孤松　名所　随意
祝博覧會　題画　何ニテモ随意

但シ題書画名所　西郡ニ限リ画工ヲシテ挿画ニ従事スル云々ハ
出郡地名委曲ニ記載ニ依ラズ

右十五題ノ詩文他ニ卓ヲ題ノ詩ニ加ヘ募ルヿアリ又一題ヲ數名ニ分チ出題スルヿアルモ他ノ適宜ニ從フヿ

右ハ第二回ノ募集ヲ以テ七月限リ事切ニ投寄ノ諸君ヘ一冊ヲ呈スルノ趣意ニ付キ此ノ段廣告ス

明治十七年三月

文信所

編輯　涂谷松青

校訂　松田聽松　再拜

東京深川靈巖町七十三番地

正風社執事

明治十七年二月十八日御届
同年　三月出版

編輯兼
出版人　涂谷恭輔
本所外手町壹番地

發賣人　稲田源吉
日本橋通四丁目五番地

定價三十錢